

埼玉育兒院初期の軌跡 I

— 小島乗眞の足跡と思想 —

大塚 良一

[抄 録]

埼玉県で初の児童養護施設である「埼玉育兒院」については、その成り立ちに不明瞭なところが多く、特に、創始者である小島乗眞は途中で育兒院を辞職している。小島乗眞は天台宗の僧侶であり、苦難の末に育兒院を開設している。しかし、法人設立の認可を受け、代表が乗眞ではなく、当時、黒須銀行の頭取である發智庄平に変わっている。乗眞は現在の埼玉県嵐山町にある安養寺の住職であったが、私財を整理して育兒院の法人認可を行っているが、その後、8年で身を引いている。本研究は、初期の「埼玉育兒院」に何があったのか、また、乗眞はなぜ育兒院を始め、辞めたのかなどについて明らかにしていくものである。

論文構成としては、創始者である乗眞についての全体像を抑える「埼玉育兒院初期の軌跡 I—小島乗眞の足跡と思想—」、さらに、なぜ、小島乗眞が埼玉育兒院を離れたのかを中心とする「埼玉育兒院初期の軌跡 II—小島乗眞と發智庄平—」の II 部構成とする。

本研究で、従来、小島乗眞として写真発表されていた人物が違っていったこと、また、唯一の写真として発表されている「埼玉育兒院の集合写真」がなぜ撮られたのか、7歳で亡くなった娘の存在や父親の状況など、現在、明らかになっていないものを調査究明した。さらに、嵐山町から東松山に移転するきっかけになったとされる、檀家との諍いについても当時の資料から明らかにした。

キーワード：埼玉育兒院 赤裸々の告白、安養寺、埼玉育兒院月報

1 はじめに

小島乗眞といっても知る人は少ない。同郷の者として筆者自身が知ったのも、近隣の古文書を整理している中で、大正8年の「社団法人埼玉育兒院援助會趣意⁽¹⁾」と「埼玉育兒院要覽⁽²⁾」という当時の資料が出てきたことに端を発する。「社団法人埼玉育兒院援助會趣意」の

首唱者の先頭に男爵澁澤榮一と書かれており、その次に發智庄平、岩崎信雄、小島乗眞、石川小一郎、本間和一、馬場源太郎、繁田武平とあり、賛成者には侯爵徳川頼倫、伯爵徳川達孝、子爵本多康虎など99名の名士が名を連ねている。では、この埼玉育児院とは何か、また、なぜこれだけの人たちを動かすことができたのか、さらに、その運営はどうしていたのが当初の疑問であった。

この埼玉育児院要覧を見ると、「本院ガ敢テ微力ヲモ顧ミズ本縣唯一ノ救兒事業トシテ努力施設致シマスルノモ要スルニ前述ノ見地ガ重ナル刺戟トナッテ居ル次第デアリマス」とあり、沿革概要には「大正元年十月現院父住職寺本縣比企郡菅谷村安養寺ニ設立、創立早々檀徒ヨリ寺産蕩盡ノ虞レアリトシ極メテ強硬ナル反抗ヲ受ク」とある。つまり、埼玉県初の育児院(現、児童養護施設)であり、比企郡菅谷村(現、嵐山町)安養寺の住職小島乗眞が設立し、檀徒から強硬な反対を受けたとのことである。しかるに要覧では、院長が發智庄平となっており、小島乗眞は院父となっている。設立から8年の間に何があったのかさらに疑問を深め、調査等を開始した。なお、調査を進展する中で、いくつかの新資料が発見され、従来定説を覆すものもあった。

本論は、Ⅱ編構成とし、第Ⅰ編は小島乗眞が埼玉育児院を開始する初期の段階を中心にみていく。また、第Ⅱ編は小島乗眞が埼玉育児院を去ることになる理由を發智庄平の人物像とともにみていくものとする。

なお、本論文は社会福祉関係の歴史論文であるため、現在では使われない差別的用語を当時のままに使用することをお許し願いたい。

1 先行研究

先行研究としては1979(昭和54)年、矢島浩『埼玉育児院—草創時代を中心に—』が挙げられる。筆者が「資料集の感をまぬかれませんが」といっているように、公文書をそのまま掲載している。また、1983(昭和58)年、葦塚一三郎、金子吉衛『埼玉の先人渋沢榮一』が埼玉育児院に関してまとめている。題目のとおり、澁澤榮一のかかわりをとおして書かれている。また、研究誌ではないが、2012(平成24)年、埼玉育児院からだされた『愛する心とこしえに 社会福祉法人埼玉育児院創立100周年記念誌』は設立からの歴史がかなり詳細にまとめている。参考文献としては関根茂章『師父列伝 わが内なる師父たち』(1997)、吉田博行著『社会福祉実務労働の基礎的研究』(2016)などがある。研究誌ではないが、地元嵐山町「小学3・4学年社会科副読本らんざん嵐山」(2011)に小島乗眞が紹介されている。

また、發智庄平に関しては、『株式会社黒須銀行史』(1920)、『黒須銀行十五年史 附り重役の片影』(1914)、『入間市史調査集録(第4号)』(1985)、『入間市史調査集録(第5号)』(1986)がある。参考資料としては「霞が関カントリー倶楽部發智庄平翁—東京2020オリンピックゴ

ルフ会場の創設にまつわる物語―」などが挙げられる。さらに、澁澤榮一の福祉事業への貢献については『萩山實務學校五十年史』(1951)がある。

Web 関係では、渋沢榮一記念財団からだされているデジタル版『渋沢榮一伝記資料』(2016)や、嵐山町 web 博物誌第6巻「近世・近代・現代編」第5章第2節「福祉社会活動」「埼玉育児院」(2012)などが埼玉養育院について取り上げている。

3 小島乗眞と「埼玉育児院」

小島乗眞は1878(明治11)年12月1日菅谷村大字大蔵安養寺に生まれる。その後については表一の小島乗眞来歴のとおりである。

表一 小島乗眞の来歴

年代	内容	備考
1878(明治11)	12月1日菅谷村大字大蔵安養寺に生まれる。	
1884(明治17)	尋常小学下等校入学 ^{注1)}	乗眞6歳
1886(明治19)	菅谷、大蔵、鎌形、三校合併して千手堂に城山尋常小学校ができる。	
1887(明治20)	尋常小学校下等卒業・天台宗大学林支校中学林入学。 ※小島乗眞は「赤裸々の告白」に「幼ヨリ父母ノ膝下ヲ離レテ佛門ニ入り流離困頓ノ限リヲ盡シテ」とある。	
1891(明治24)	尋常小学校卒業・天台宗東部大中総覺入学。 ※1874(明治7)年東昌寺を借りて菅谷学校が設立される。(教員男1人、生徒数男40人・女5人、毎月の授業料は4銭) ^{注2)}	
1894(明治27)	天台宗大学林支校中学林卒業。	
1896(明治29)	6月、大河村(現小川町)長福寺の住職となる。	乗眞18歳 ^{注3)} 。
※明治29年6月から明治41年	※累次の布教講習会に出席して明治33年より同43年まで教区布教師及び本山布教師の職にあり ^{注4)} 。 ・明治31年娘桃枝生まれる。長女と想定できる。 ・明治37年娘桃枝逝去。(娘、藤枝が施主となる) ^{注5)}	乗眞24歳。
1908(明治41)年	・9月安養寺の住職となる。 ※三千枝が生れる。「赤裸々の告白」大正3年に「當時僅カニ六歳トナリシ愛児三千枝」とある。なお、乗眞は子どもの名前には「枝」をつけており、桃枝、藤枝、三千枝である。他の研究では次女三千枝と書かれているが、三女のため、あえて「三」を使用したと考える。	乗眞30歳。
1912(大正元)	10月20日「積徳育児院」を開設する。嵐山町大字大蔵安養寺内。	乗眞34歳。
1913(大正2)	【積徳育児院の状況】 当時の状況を矢島浩(1979)は「院児は12名(内乳児6名)、従事者は院父小島乗眞氏、院母小乗島眞氏夫人、乳母2名、使丁1名となりましたが、経済的には苦しさが一段と増し、小島乗眞氏及び家族の衣類等すべて、院の経営の資に転用されたが、それでも食料にことかく困難が続いて、其の苦勞のため小島乗眞は神経衰弱に襲われる程でありました ^{注6)} 」といっている。 ・12月に比企郡大河村大木隆次郎氏の視察を受け困難な状況に同情され、前大河村村長野口宣鋭氏、同村円城寺住職西澤太道師等の同志を募り、援助を行う。	乗眞35歳。 積徳育児院への初めての支援。

埼玉育児院初期の軌跡 I (大塚良一)

<p>1914 (大正 3)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 月, 麻疹の流行あり, 院児 9 名 (内 6 名は乳児) が感染, 6 名が死亡。 ・ 1 月 24 日, 松山警察署小川分署に出頭。留置される。 ※ 檀徒の反発が爆発する。 ・ 1 月 23 日, 添田埼玉県知事より経費募集の公充あり。 ・ 3 月「比企郡長奥田栄之助氏の深厚なる同情により, 幾分の曙光を認められる」とある。 ・ 4 月天台宗第十二教区会に於いて事業の援助の決議がなされた。 ・ 9 月「積徳育児院」を「埼玉育児院」と改め, 法人組織準備を始める。 ・ 10 月, 添田知事の推薦で, 内務省主催の感化救済事業講習会へ出席。 ・ 12 月内務省嘱託高田法学士, 秋田県属と埼玉育児院視察。 ※ 12 月發智庄平宅に来訪し育児院のことを訴えている^{注7)}。 <p>「赤裸々の告白」に檀徒の住職引退を迫られたとき「當時入間學友会發智庄平氏, 本郡高坂村正法寺住職小谷野忍海師, 等ノ知ル所トナリ極力援助ヲ興ヘラレ幸ニ事ナキヲ得タリ」とある。</p>	<p>乗眞 36 歳。</p>
<p>1915 (大正 4)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 月比企郡教育会から社会公益に対して功労大として表彰される。 ・ 2 月天台宗公認団体として, 天台宗座主の承認を得る。 ・ 2 月下旬小池主事風邪から肺炎になり一時危篤の状況になる。 ・ 4 月から日本弘道会から秋葉徳次郎会員がきて主事として応援してくれる。(小島乗眞「埼玉育児院経過ニ関する赤裸々の告白」から) ・ 4 月「埼玉育児院」と名称を正式に改名し, 定款を定める。 ・ 「謹ンデ天下ノ志士仁人ニ訴フ」のパンフレットを大量に発行する。 ※ この時期になると「檀徒が急変して深厚なる同情をする者と変わり, 其の変化に小島乗眞氏自身が驚いていたようである」といっている。 ・ 6 月下旬等覚寺住職金子海忍師が視察のため来園。慈善演芸会を開催する。約 400 名の定期出資の会員を得る。 ・ 11 月唐子村定宗寺 (八正山薬王院定宗寺) 吉見常照師より額面金 5 拾円七分利付勸業債券一葉を寄付せらる。 	<p>乗眞 37 歳。</p>
<p>1916 (大正 5)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 比企郡唐子村唐子の有力者馬場源太郎氏へ窮状を訴えた。馬場は親戚にあたる入間郡霞ヶ関村笠幡の大地主である發智庄平に相談を持ちかける。 ・ 11 月 25 日發智庄平育児院を訪れ事業の重要性を認め援助を約した。当時の入間學友会頭發智庄平の紹介により, 澁澤榮一男爵に面会。男爵は乗眞師の意図に大いに賛同し援助を約した。 ・ 12 月 4 日, 發智庄平の紹介で澁澤榮一に面会。協力が得られる。 ・ 12 月 21, 22 日, 發智庄平自ら本郡内有力家を歴訪し, 懇談。 	<p>乗眞 38 歳。 ・ 澁澤榮一, 喜寿を機に実業界を引退し第一銀行頭取を辞す。</p>
<p>1917 (大正 6)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 月 6 日社団法人設立発起人会を院内で開催。 ※ 小島乗眞は育児院設立以来の院の負債を父より与えられた山林 8 反 3 畝 14 歩, 畑 6 畝 4 歩を売却し創立以前の負債全部を償却し, 日用器具はすべて法人に寄付した^{注8)}。 ・ 3 月 12 日内務省へ社団法人設立許可申請書を, 發智庄平氏を筆頭者にして提出。此の時に, 比企郡菅谷村安養寺にあった養育院を, 比企郡松山町 5651 番地 (東松山箭弓神社側) に移転を計画している。 ・ 6 月澁澤男爵の紹介により, 在京県人有志家を訪問してその援助を求め, 金 1 万円の基本金を作るべく運動を開始した。 	<p>乗眞 39 歳。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・7月31日付で比企郡長より内務部長に法人設立許可申請に関する件として、法人設立者身元調、埼玉育兒院基本財産目録に関する件、法人維持計画並びにその収支目論見（第一期大正7年より大正11年まで、第二期大正12年より）が提出される。 ・12月3日日本郡役所会議室に於ける協議会の決議により、彌々来る16日移轉すべく本日より諸種の準備を始め忙殺せらる^{注9)}。 ・12月16日午後2時村内多数見送りの下に一同馬車にて出発3時箭弓着この日、金井柳作、金井仁助、金井猶次郎三氏、特に松山まで見送せられたり^{注10)}。 <p>※菅谷村から東松山に移転。このことについて、小島の娘角谷三千枝は「その時院児や小島の家族は馬車に乗って引越した。移転先はとりあえず箭弓神社近くの長多屋という料理屋の大きな空き家であったというそこで小島の一家は院児と同居していた^{注11)}」と述べている。</p>	<p>※松山本町4「長多屋」という広告が埼玉育兒院月報第壹號に記載されている。</p>
1918 (大正7)	<ul style="list-style-type: none"> ・2月23日内務大臣後藤新平名で許可がおりる。 ・3月12日役員選挙を終えて、新役員により発足。 ・3月18日に法人設立登記が完了した。發智庄平が代表理事、院長になり、乗眞は理事・院父となった。 ・5月10日 事業補助として天台宗本山より金25円下附される。 ・5月14日 第一回社員総会。松山城恩寺で開催。澁澤榮一が「救済事の意義」と題して講演。 ・7月 埼玉育兒院月報【第壹號】発行。 ・10月20日「埼玉育兒院經過二関スル赤裸々ノ告白」発表。 	<p>乗眞40歳。</p>
1919 (大正8)	<ul style="list-style-type: none"> ・1月24日 發智庄平埼玉育兒院の件で、澁澤榮一宅に伺う。 ・2月18日 小島乗眞埼玉育兒院の件で、澁澤榮一宅に伺う^{注12)}。 ・6月13日松山町大字松山字箭弓町5657番1,5657番2の土地を購入。 ・9月8日 新院舎が完成。 <p>※ 小島乗眞の関係から松山付近の埼玉仏敎青年会の有志が一日托鉢を行って援助する。また、松山町関根勇が大学を卒業後育兒院の事務に携わる。友人の利根川寿郎などと東松山青年団は育兒院のため映画会を開催する。</p>	<p>乗眞41歳。</p>
1920 (大正9)	<p>※ 2月12日小島乗眞一家は松山町内に新たに一戸建てを構えてそこから院に通うようになる。</p>	<p>乗眞42歳。</p>
1921 (大正10) ~ 1931 (昭和6)	<ul style="list-style-type: none"> ・大正10年 乗眞は院から身を引く。浦和の県庁に通う。部落改善事業に携わる^{注13)}。 ・乗眞は大塚の養育院（現、都立養育院）に一時勤める。 ・大正13年4月6日 澁澤榮一埼玉育兒院を訪問し職員を激励する。 ・大正14年ごろ妻たつ（子）も育兒院を辞め娘三千枝とともに東京で乗眞と暮らす。 ・昭和3年11月埼玉育兒院舎新築松山町より移転する。 <p>※移転先 入間郡霞ヶ関村大字笠幡4904番地</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昭和6年3月14日東京で死去。 ・昭和8年1月25日發智庄平院長を辞する。 ・昭和10年ごろ、松山町の天台宗の僧侶たちが松山町福聚寺にて法要を営み、遺骨を同境内にある埼玉育兒院の子どもたちの墓地に埋葬。菩提を弔った。 	<p>乗眞43歳。</p> <p>大正12年関東大震災発生。</p> <p>乗眞享年54歳。</p>

出所：矢島浩『埼玉育兒院—草創時代を中心に—』むさしの書房1979年等から作成。

注1) 当時の天台宗の大敎院解散後の僧侶育成機関は「大学林を比叡山に、中学林を滋賀・東京に各一校ずつ設置。全国の各寺院を小学林とする」とある。(江島尚俊「明治初期の僧侶育成改革と大敎院」)

『大正大学総合佛教研究所年報 33 号』2010 年 .296 頁) 小島乗眞がどこの小学林を出たのかは不明である。

- 注 2) 『菅谷小学校の歴史』嵐山町 web 博物誌 嵐山町 web 博物誌 (ranhaku.com) 2021.6.24 閲覧。
- 注 3) 岩本教明『長福寺の史実を探る』高勝山恵覚院長福寺 1998 年 .19 頁。明治 29 年酉申 6 月第四十九世とある。また、長福寺五十世全海法印が明治 41 年 9 月に長福寺住職に就いていることから、その月に安養寺住職に就いていると想定できる。
- 注 4) 矢島浩『埼玉育兒院一草創時代を中心に』むさしの書房 1979 年 .65 頁。
- 注 5) 大河村 (現小川町) 長福寺に乗眞の娘桃枝の墓碑あり。
- 注 6) 前掲 3).p20。
- 注 7) 埼玉育兒院『愛する心とこしえに 社会福祉法人埼玉育兒院創立 100 周年記念誌』2012 年 .30 頁。
- 注 8) 関根茂章『師父列伝 わが内なる師父たち』邑心文庫 1997 年 .68 頁。なお、これについては「埼玉育兒院経過二関スル赤裸々ノ告白」の中に、「社団法人設立發起人会ヲ院内ニ開催シ、余ハ父ヨリ伝ヘラレタル山林八反三畝十四分・畑六畝四歩ヲ売却シ、創立以来法人組織以前ノ負債全部ヲ償却シ、更ニ日用器具悉皆ヲ法人ニ寄附シ真ニ赤裸々ノ身トナリ、弥々具体的組織ノ機運ニ際合シ、転タ今昔ノ感ニ堪ヘズ」とある。
- 注 9) 埼玉育兒院『埼玉育兒院月報第壹號』1918 年 .7 頁。
- 注 10) 前掲 9).p7。
- 注 11) 椎塚一三郎、金子吉衛著『埼玉の先人洪沢栄一』さきたま出版会 1983 年 .215 頁。
- 注 12) 第 30 卷 (DK300035k) 本文 | デジタル版『洪沢栄一伝記資料』 | 洪沢栄一 | 公益財団法人洪沢栄一記念財団 (shibusawa.or.jp) 381 頁, 2021.6.24 閲覧。
- 注 13) この内容に関しては、前掲注 11) の『埼玉の先人洪沢栄一』に掲載されている。菅谷から松山への移転時の状況について「小島の次女角谷三千枝の語るところによれば」と言っていることから、インタビューからの記載と考えられる。また、1923 (大正 12) 年「埼玉育兒院報」で、二代目院父小池徳重が「昨年、3 月より院父として任院の身となり」といっている。「埼玉育兒院報」が 1923 (大正 12) 年 7 月 15 日発行から考えると、1921 (大正 10) 年 8 月には乗眞が埼玉育兒院から身を引いていることが分かる。

なお、明治政府は 1872 (明治 5) 年に教部省を設置し、神仏合同布教の教導職道場大教院の構想を行うが、「神道一辺倒の薩摩閥系」官僚の台頭で具現化できなかった。大教院解散後各教団は独自の僧侶育成制度を行っている。天台宗の場合、1880 (明治 13) 年天台宗大学林を設置し、大学林を比叡山に、中学林を滋賀・東京に各一校ずつ設置し、全国の各寺院を小学林としている⁽³⁾。

小島乗眞がどこの小学林に通ったかについては不明であるが、中学林に関しては、明治初期の天台宗中学校は 2 か所であり、1879 (明治 12) 年比叡山恵日院内に設けられた第一号中学⁽⁴⁾と上野寛永寺境内の「天台宗大学林支校」である⁽⁴⁾。なお、「天台宗大学林支校」は「天台宗東部大中総覺」と名称が変更されている⁽⁵⁾。乗眞と同世代 (2 年先輩) の岩崎の来歴には「天台宗大学林支校」という名称を使用していることから、ここでは「天台宗大学林支校」と表記する⁽⁶⁾。

乗眞がどこの中学林に通ったかについては、安養寺四十六世鶴岡信良住職から、「現在駒込にある天台宗中学を卒業したこと。また、卒業名簿にも記載されている」との情報をいただく。これにより岩崎と同様に「天台宗大学林支校」に通ったという可能性が高くなった。

さらに、乗眞が後年、東京で単身生活をするのもここに素地があったと考察できる。当

時の旧制中学は尋常中学校と高等中学校があり、乗眞は17歳で卒業しているところから尋常中学校を卒業していたと考えられる。また、乗眞自身も「赤裸々の告白」の中で、「幼ヨリ父母ノ膝下ヲ離レテ佛門ニ入り流離困頓ノ限リヲ盡シテ⁽⁷⁾」とあるため、安養寺を離れさすらい自分自身がどうなるかも分からない中で、修行をしてきたと考えられる。なお、これについては乗眞の2年先輩である岩崎信雄の来歴からも想定することができる。岩崎も府中町に生まれ、群馬県光巖寺天台宗中学林小学林、二松学舎尋常科を卒業し、天台宗大学林支校中学林に進学している⁽⁸⁾。また、岩崎が「天台宗大学林支校」で乗眞の先輩であったことが確認できた。

当時の仏教界が廃仏毀釈運動等の危機的状況の中で、子弟を親元から離し、他に頼らない自立した人材育成をめざす教育を行い、仏教界が置かれている現況を打破することを目的としていたことが分かる。乗眞も岩崎も当時、天台宗の優秀な人材の一人であったことはこの略歴の中からも理解できる。

小島乗眞の家族は妻たつ（子）、娘の藤枝、三千枝の4人家族であり、大河村（現：小川町）長福寺時代に結婚したと考えられていた。しかし、長福寺岩本教裕住職から寺に乗眞の娘の墓があることを教えていただく。小島乗眞娘桃枝の墓として墓石には正面に「桃林亮紅童女」右に「明治卅八年七月廿三日俗名桃枝七才」、左には「施主小島布慈枝」とある。「布慈枝」とは、娘の藤枝のことと考える。このことから、乗眞は長福寺時代に結婚し、娘を明治38年7月に7歳で亡くしていることが分かる。また、長福寺過去帳には、菅谷百八十二番口号と書かれている。



※長福寺にある乗眞の娘「桃枝」の墓碑、岩本住職の許可を得て筆者撮影。

この長福寺時代の12年間が育児院を始める素地を創っているものと思えるが当時の資料が残されていないためまだ研究の余地があると考えられる。

(1) 「初期埼玉育児院の写真」と小島乗眞

小島乗眞については、残されている資料が少なく、そのため特定できる写真等もなく⁽⁹⁾、写真等があったとしてもそこに写っている人物が誰なのかを特定することは難しいといわれている。その中で、1972(昭和47)年に嵐山町鎌形、県郷土文化会理事の長島喜平が埼玉育児院の集合写真を発見した。このことは、毎日新聞埼玉版(1972年9月6日付)で紹介している⁽¹⁰⁾。また、この写真を元嵐山町町長の関根茂章(1997)が『師父列伝 わが内なる師父たち』の中で使用し、「育児院創設当時、子供たちの後に座す小島師(子供を抱く婦人の右隣)」と紹介している⁽¹¹⁾。なお、この写真についての人物検証はなされていない。また、何のために撮られたのかも検証されていない状況であった。



※長島喜平が発見した写真。

出所:埼玉県『埼玉県史通史編5近代1』1988年.1059頁から複写。

この長島喜平が発見した埼玉育児院の集合写真が、今回の調査でその出所が判明した。この写真は、1917(大正6)年9月に増田五六が編集兼発行した『小川案内附近郷名所寫真帖』の中で使用された写真である。この写真は『埼玉県史通史編5近代1』でも使用しているが、その出所が『小川案内附近郷名所寫真帖』であることについては、どこにも記載されていない。今回の研究調査の発見の一つである。



※増田五六編集兼発行『小川案内附近郷名所寫真帖』1917年から複写。
出所：小川町歴史研究家、内田康男所蔵。

なお、『小川案内附近郷名所寫真帖』には「埼玉育兒院」について「創立當時にありては地方の誤解的反対あり非常なる大迫害に逢ひ苦心慘愴の境に陥りしも献身的努力と一般の了解とに依り漸次發展の機運に向ひ大正五年十二月本縣篤志家發智庄平氏及澁澤榮一男の知る所となり郡内有志の援助により愈々社團法人となり本縣唯一の私立救済事業として一種の特色を發揮せんとしつゝあり¹²⁾」と書かれている。

なぜ、この写真を『小川案内附近郷名所寫真帖』で使用したかについては、そこに小川町を代表する人物が撮影されているからだと考察できる。写真の3列目左から5番目が發智庄平である。發智に関しては、色々な文献に写真等が紹介されているため、その是非を問う必要はないが、發智の左隣が当時の小川町長加藤忠雄、さらに、その左隣が大河村長（現：小川町）横川禎三である¹³⁾。二人とも当時の小川町、大河村を代表する人物であり、そのため『小川案内附近郷名所寫真帖』に載せたと考えられる。

また、埼玉育兒院に早くから協力している大河村大木隆次郎もこの中にいると思えるが、特定できる別写真が残されていない。他に確認できるのは、埼玉育兒院に早くから援助し、実際に子どもを預かり育成していた玉川村長岡本忠七は發智から右3番目に確認できる¹⁴⁾。この『小川案内附近郷名所寫真帖』が発行されたのが、1917（大正6）年9月16日である。小島乗眞の「埼玉育兒院經過二関スル赤裸々ノ告白」の中に、「大正六年一月六日、社團法人設立發起人会ヲ院内ニ開催シ」とあることから、發起人会は1917（大正6）年1月6日で、この時、撮影された写真を『小川案内附近郷名所寫真帖』で使用していることが分かる。また、『小川案内附近郷名所寫真帖』の写真の下にも「社團法人埼玉育兒院設立發起人会記念撮影」とある。

なお、元嵐山町町長の関根茂章（1997年）がこの写真を基に小島乗眞を「子供を抱く婦人の右隣」と紹介しているため、以後の文献ではこれが定説として使われている¹⁵⁾。しかし、子どもを抱く右隣は法衣ではなく作務衣のようなものを着用している。作務衣を着て埼玉育兒院代表として發智庄平や地元の有力者、高僧と写真を撮ることはないと考えられる。さらに、

写真を紹介した毎日新聞埼玉版では、写真の紹介として「発見された埼玉育児院記念写真。前列は育児。前二列目、右から五人目が乗真師」と紹介している。前列二列目右の女性が立っているため、座している者を二列目とするか迷う点である。

なお、吉田博行(2016年)は「小島乗真の写真はこの写真しかない」と紹介しているが¹⁶⁾、今回の調査の中で、1921(大正10)年「埼玉育児院報新年號¹⁷⁾」が発見され、その中に、小島乗真の写真が紹介されていた。この資料に関しては筆者が偶然に見つけたものであり、古い資料のため写真等写りが悪いが、他に乗真自身が特定されているものはなく、貴重な一枚である。また、同資料の中に小池徳重主事が撮影されているものがある。乗真の「埼玉育児院経過二関スル赤裸々ノ告白」の中に「当時唯一ノ事務員トシテ深ク余ノ力トセル主事小池氏ハ¹⁸⁾」とあることから埼玉育児院の集合写真の中に小池主事が写っていると考える。

これらのことから、「埼玉育児院の集合写真」と『埼玉育児院報新年號』の乗真と小池主事を照合する。左は「埼玉育児院の集合写真」、右は『埼玉育児院報新年號』である。

また、「埼玉育児院報新年號」は1921(大正10)年1月1日に発行され、小島乗真、小池主事の写真は1920(大正9)年10月に撮影されているものである。社団法人設立發起人会が開催されたのが1917(大正6)年1月6日であることから、二つの写真には3年10か月の時間のずれがある。しかし、小島乗真については、「埼玉育児院の集合写真」、『埼玉育児院報新年號』の写真が同一人物だと特定できる。



※「向テ左ヨリ柳崎未亡人、横尾本瑞、井上了泰、白石良範、小島院父」とある。(大正9年10月27日)

※「前列向テ右ヨリ綾部川越町長、小池主事婦人及び棄兒 なか 後列向テ右ヨリ増田川越署長、早川助役、鈴木書記、小池主事」棄兒収容記念撮影(大正9年10月23日川越町役場ニ於テ)とある。

出所:筆者所有「大正10年1月1日発行、埼玉育児院報新年号」から複写。



※左の写真は人名が明記されていない、右の写真小島乗眞と特定されている。
東松山市「盛島スタジオ」の協力を得て判別できる段階まで写真を復元する。



※左の写真は人名が明記されていない、右の写真は小池主事と特定されている。
出所：増田五六編集兼発行『小川案内附近郷名所寫真帖』，筆者所有『大正10年1月1日発行，埼玉育児院報新年号』から一部抜粋。

なお、この写真から小島乗眞は眼鏡をかけ、当時他の者は皆和服であるが、1921（大正10）年で、既に洋服を着こなしていたことが分かる。小池主事については、『埼玉育児院報新年号』の写真では髭を生やしていることから識別は難しく、この写真をもって特定するには無理があると思えるが、筆者は、小島乗眞が「埼玉育児院経過ニ関スル赤裸々ノ告白」の中に「当時唯一ノ事務員トシテ深く余ノカトセル主事小池氏」と紹介していることから埼玉育児院の集合写真には必ず参加していること、さらに、乗眞の左隣に座していることから、この人物が小池主事と考える。なお、この集合写真には岩崎信雄が写されていると考えられる。岩崎信雄については、浄光寺本堂に「當山第44世佛塔院岩崎信雄大和尚照影」と紹介されていた。これによると、「埼玉育児院の集合写真」の子供を抱く婦人の右3番目が岩崎信雄だと確信する。



出所: 右 2021 年 7 月筆者撮影 (岩崎信雄写真本堂内の「當山第 44 世佛塔院岩崎信雄大和尚照影」から同寺の許可を得て撮影), 左『小川案内附近郷名所寫真帖』から一部拡大。
浄光寺住職に確認。岩崎信雄とのこと。(2021.7.16)

埼玉育児院の集合写真が撮られてから、約 100 年が経過しているため、これ以上の写真判定は難しいが、関根茂章著『師父列伝 わが内なる師父たち』が発行されてから約 25 年間に渡り、小島乗眞が間違えられていたことを新写真発見により訂正できたと考える。

(2) 小島乗眞と父乗寛

小島乗眞は 1908 (明治 41) 年に 31 歳で安養寺の住職となる。安養寺は乗眞が生まれ育った寺であり、天台宗の寺で正式名は大乗山寂光院安養寺といい、1394 (応永元) 年 5 月の開基となっている⁽¹⁹⁾。「嵐山町 web 博物誌」には安養寺に「現在ノ姓名小嶋乗寛」と書かれている⁽²⁰⁾。この資料自体がいつ書かれているか不明であるが、大蔵村沿革のところに「1884 (明治十七) 年七月本村外八ヶ村ヲシテ菅谷村聯合戸長役場ヲ置ク」とあることから、明治の初期であり、小嶋乗寛が乗眞の父親である考えられる⁽²¹⁾。

なお、安養寺には小島乗寛の墓があり正面に「(梵字) 安養寺第四十世/阿闍梨權大僧都法印乘寛塔」とあり、左脇には「施主小島乗眞/武田孝信/忍田由五郎」となっている。また、台座には筆弟とあり、同側面に 24 名の地区名と名前が刻まれている。なお、墓石右側には乗眞が撰文した乗寛の経歴がある。それによると、「天保十三年 (1842) 比企郡大串村 (現吉見町大串) に生まれ、本姓は伊東氏、大河村長福寺の乗朋のもとで受戒得度後、十数年精励修



※写真右が台座であり、正面に「筆弟」と刻まれており、地区名、名前が刻まれている。

(乗眞が明治 41 年 6 月から大正 6 年 12 月まで在住)

出所: 安養寺・乗寛の墓 2021 年 5 月筆者撮影。

業し、明治維新で安養寺が廃絶の危機に瀕したため、檀徒の懇情により当寺の住職となった。以来檀徒と力を合わせて当寺永続を図るとともに、特に観音講社を開創し衆庶救済の大願をもって鋭意寺門復興を図り、明治37年9月6日遷化した^[22]とある。

小島乗寛は、1842(天保13)年生まれであり、安養寺の第四十一世住職である。乗寛の前の安養寺四十世住職は旭順であり、同敷地内墓石に「明治三年天／正月初六日」とあることから、1870(明治3)年1月6日に亡くなっていることが分かる。乗寛が安養寺住職になったのは、明治維新で安養寺が廃絶の危機に瀕したため、檀徒の懇情により住職になったと乗寛の墓石にあることから、旭順がなくなった年である1870(明治3)年1月6日から廃仏毀釈が落ち着き出した1876(明治9)年ごろまでに住職になっていると考察できる。また、乗眞は1878(明治11)年12月1日生まれであることから、乗寛が36歳の時の子どもとなる。

さらに、乗寛の台座には「筆弟」とある。筆弟と書かれた墓は筆子塚と呼ばれている。小平市史近世編の中に、「筆子塚とは、手習塾の生徒が師匠のために資金を出し合って建立した墓碑である。近世の手習塾では、師弟関係は親子同様に親密なものとなり、師匠は地域住民から敬意を払われていた。生徒は手習いの指導だけでなく、生活態度から礼儀作法にいたるまでの指導を受け、師弟関係は終生のものとなっていた。その師匠の死に際して、生徒らの敬意のかたちとして顕したものが筆子塚である^[23]」とある。このことから、乗寛は安養寺で寺子屋をしていたことが分かる。なお、小学校成立直前の明治初年の埼玉県内寺子屋師匠数は595人で、江戸末期天保年間(1830～44)～明治5年までに所在していた寺子屋数は731^[24]ある。この中に安養寺は明記されていないが、当時は寺が学校の機能を果たしており、墓碑からもその痕跡がうかがえる。

なお、安養寺歴代住職の墓をみると、第三十九世住職旭順も裏面に「筆弟子」とあり、26名の名前が刻まれている。さらに、第三十八世住職照順の墓にも30名の名前が刻まれている。これらのことから安養寺は江戸時代後期には寺子屋として村の子どもたちの教育をしていたことが分かる。

矢島浩(1979)は「安養寺は新編武蔵野風土記稿にも紹介されています古い寺で、近在の農民からは大蔵の観音様としてしたしまれています^[25]」と述べている。また、小島乗眞の「埼玉育兒院経過ニ関スル赤裸々ノ告白」の中に、「教界ノ事、頗ル憂慮スベキモノアリ、父ノ信仰ニ感化セラレテ幼ヨリ観音信仰ヲ抱キ(中略)常ニ観音薩埵ノ靈肉兼濟主義ノ實現ニ志セシ身ノ今日ノ事、口舌ノ能ク爲スベキ秋ニアラズ、須ラク具体的救済ニヨリ漸次精神的ニ及ボスベキヲ確信シ」とあり、父乗寛の観音信仰について深く傾倒していることが分かる。

(3) 小島乗眞と岩崎信雄

安養寺の寺格は「比企郡下青鳥浄光寺末派^[26]」とある。浄光寺は岩崎信雄が1914(大正3)年から住職を務めているところである。岩崎信雄は1876(明治9)年生まれで乗眞より2年

先輩であり、埼玉育児院設立にあたり理事・副院長に就いている。乗眞との関係が深かったことが分かる。岩崎については、浄光寺「當山第 44 世佛塔院岩崎信雄大和尚照影に題す（以下、「照影に題す」という）」があり、略歴が記されていた。

その中に、岩崎が東京福田会育児院の司事をしていることが記されていた。この「照影に題す」では、「救児の養育に努む、福田会を去るに当たりては幼児ら師の袖にすがって離さず共に泣き泣き別れを惜しまれし一事にも師の面目躍如たるをみる」とある。

矢島浩（1979）も「共に天台宗の住職であることから、岩崎信雄氏が埼玉育児院設立の役割の大きさも考えられます²⁷⁾」と述べている。ちなみに、乗眞は 1931（昭和 6）年 3 月 14 日に東京にて 54 歳で亡くなるのだが、東松山付近の天台宗の僧侶たちは彼のために東松山福聚寺で法要を営み埼玉育児院の子どもたちの墓地に葬った²⁸⁾とあり、岩崎信雄を含む当時の天台宗教区の僧侶が深く関与しているのではないかと思える。また、葦塚一三郎、金子吉衛（1983）は「小島はこの岩崎の働く育児事業に触発され、育児院の創設を思いついたのではないかと思われてならない²⁹⁾」と述べている。筆者も同意見であり、それを知る手掛かりが小川町長福寺の時代であったのではないかと考えるが、その時代の資料はほとんど発見されていない。

(4) 開設当初の埼玉育児院と安養寺檀家

乗眞は 1908（明治 41）年に安養寺住職となるが、おそらく乗眞の父親が亡くなり寺を継いだと考えられる。その 4 年後の 1912（大正元）年 10 月 20 日「積徳育児院」を嵐山町大字大蔵安養寺境内で開設する。育児院が開設されて 1 年が経過した 1913（大正 2）年の育児院の状況は「院児は 12 名（内乳児 6 名）に増加致しています。従事者は院父小島乗眞氏、院母小島乗眞氏夫人、乳母 2 名、使丁 1 名となりましたが、経済的には苦しさが一段と増し、小島乗眞氏及び家族の衣類等すべて、院の経営の資に転用されたが、それでも食料にことかく困難が続いて、其の苦勞のため小島乗眞は神経衰弱に襲われる程でありました³⁰⁾」とあり、設立当初から困窮していることが分かる。乗眞の「埼玉育児院経過ニ関スル赤裸々ノ告白」の中に初期の檀家の反応がある。この檀家の反応は、安養寺の住職に 30 歳でなり 4 年後に積徳育児院を開始するとの発言は、経済的素地もなく、主たる協力者もない、誰がみても無謀であり檀家総代のいう「本事業ノ性質誠ニ可ナリト雖モ相当資産アルモノ猶ホ為シ易カラズ況ンヤ当寺ノ如キ貧小寺院ニ於テオヤ、恐ラクハ寺産ヲ蕩尽シテ猶ホ足ラザルベシ³¹⁾」は極めて正しい忠告であり、現実にはそのとおりの展開になっている。また、安養寺に実際に行ってみると、寺の規模が小さいとはいえないが、この寺で育児院を開設するには、他に経済的に頼るものがない限りでは難しいと感じられる。さらに、檀家からの協力も得られないなか、なぜ乗眞が育児院を始めたのか理解に苦しむところである。

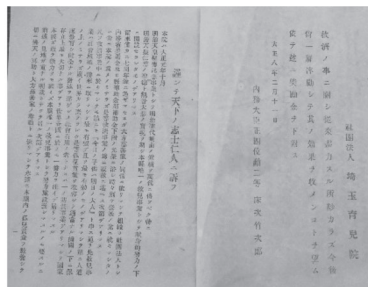
このように積徳育児院の当初の問題は、檀家の理解を得ず、支援等の目途が立たない中で強引に開設したことにある。「埼玉育児院経過ニ関スル赤裸々ノ告白」に「止ムヲ得ズンバ寺

ヲ捨テ妻ヲ捨テ孤兒ト共ニ餓死スルノ覚悟ヲ以テ檀徒ノ抵抗モ家族ノ懇請モ平然知ラザルヲ装ヘリ」とあり、乗眞の性格によるところが大きいと考えるが、なぜここまで自分自身や他を追い詰める必要があったのかも分からない点である。

また、育児院への最初の支援に視点を変えてみると、1913（大正2）年12月に「比企郡大河村大木隆次郎氏の視察を受け困難な状況に同情され、前大河村村長野口宣鋭氏、同村円城寺住職西澤太道師等が同志を募り、援助を行っている」とある。大木隆次郎は書家であり、助役、村会議員を務めた人物でもある³²。なお、円城寺は曹洞宗の寺であり、乗眞は天台宗の僧侶である。小川町の長福寺時代の14年間の中で、乗眞が育児院構想を話し、同村の若き僧侶集団に影響を与えていたと思える。

さらに、積徳婦人会についても長福寺時代に檀家のつながりの中から構想したのではないかと考える。そのため、嵐山町安養寺に移り、長福寺檀家との関係が途絶え、新たな檀家との関係をつくる前に、何らかの事により協力関係が途切れたのではないかと考察することができる。

檀家との関係については、1915（大正4）年4月の「埼玉育児院」と名称を正式に改名し、定款を定める。「謹ンデ天下ノ志士仁人ニ訴フ」のパンフレットを大量に発行する。この時期になると「檀徒が急変して深厚なる同情をする者と変わり、其の変化に小島乗眞氏自身が驚いていたようである³³」と述べている。



※パンフレット「埼玉育児院要覧」大正8年2月11日付。

※大正8年となっているが、内容的には前半は大正4年と同じものとする。

出所：筆者所有。

この檀家や近隣の変化については、「埼玉育児院月報第壹號」からもみることができる。月報の「日誌抜抄」の中に、移転前の1917（大正6）年12月13日付に、「菅谷村村長關根茂十郎氏全村小學校長田中長亮氏全村向徳寺住職永井諦善師東昌寺住職根松福童師の主唱により村内有志賛同の下に菅谷小島樓に於て本院移轉祝賀會を開催せられ午後二時關根村長の挨拶に始まり田中校長永井師千手院住職金子曹巖師の祝辞演説あり宴酣にして小島院父の痛切なる謝辞あり主客各興を恣にし萬歳三稱午後六時散會せり會する者五十有余名³⁴」とある。つまり、松山町の埼玉育児院の移転が決まり嵐山町の小島樓にて菅谷村村長等の地元有志が祝賀会を

行っており、50名以上の参加者があったとのことである。

さらに、同誌には「十二月十六日午後二時村内多数見送りの下に一同馬車にて出発三時箭弓着此の日金井柳作金井仁助金井猶次郎三氏特に松山迄見送せられたり³⁵⁾」とある。この金井柳作は1879(明治12)年9月生まれ³⁶⁾、乗眞より一つ年下で、大蔵の住人で(安養寺より少し菅谷より)であり、1917(大正6)年1月の埼玉育児院設立者の一人になっている。また、菅谷村会議員、菅谷村軍人部会長でもあり、「大蔵ノ大尽」といわれた素封家である³⁷⁾。安養寺に墓石があり檀家である。また、金井仁助、金井猶次郎も同様であり、わざわざ松山まで来てくれている。

蕪塚一三郎、金子吉衛は、この松山への移転を「小島としては、かねて育児院に理解なき郷党に不審の念を抱いており、追われるような気持から、新天地に事業の発展を期したものであろう」といっているが、1917(大正6)年1月6日から社団法人設立発起人会が開催され、この時期から主導権が乗眞から發智庄平になっている。同年3月12日内務省へ社団法人社団法人設立許可申請書を、發智庄平氏を筆頭者にして提出。この時に、比企郡菅谷村安養寺にあった養育院を、比企郡松山町5651番地(東松山箭弓神社側)に移転を計画している³⁸⁾ことから、蕪塚一三郎、金子吉衛のいう「理解なき郷党に不審の念を抱いて、追われるような気持から新天地に移転した」のではないことが推察できる。

最初の移転は箭弓神社近くの「長多屋」である。この写真は月報壹號に掲載されていた写真である³⁹⁾。なお、長多屋については「松山本四 料理仕出し『長多屋』」との広告掲載が同月報にある⁴⁰⁾。また、利根川俊吾『ふるさとの想い出写真集明治・大正・昭和東松山』の中に、「鍋屋、吉見屋に遅れて大正一三年長多屋でも三階建を新築し、仲間入りをした」とある。



※松山町最初の移転地。

※箭弓神社近くの「長多屋」を仮住まいとした埼玉育児院

(仮住まい期間 1917年12月16日～1919年9月8日)

出所: 筆者所有: 埼玉育児院『埼玉育児院月報第壹號』1918年から複写。

(5) 小島乗眞と發智庄平

乗眞と發智庄平との出会いは1914(大正3)年12月に發智庄平宅を訪問、この時、育児院

のことを訴えているが、發智はすぐさま支援の約束を行うことはしていない。

乗眞が1916(大正5)年に比企郡唐子村下唐子の有力者馬場源太郎へ窮状を訴え、馬場は親戚にあたる入間郡霞ヶ関村笠幡の大地主である發智庄平に相談を持ちかけ、同年11月25日發智庄平が育児院を訪れ事業の重要性を認め援助を約したことから始まる⁽⁴¹⁾。この馬場源太郎は地元の小作(約90名)の代表として地主総代と渡り合い要求を受け入れられないため大挙して役場に乱入、代表者の馬場は松山署に引き渡され5日後に放還されているとのとの当時の記事がある⁽⁴²⁾。この中で、少し気になるのは、發智家は大地主であり、馬場は小作人の代表とある。当時の慣例からして姻戚関係があったとは考えにくい。また、1921(大正10)年「埼玉育児院報新年號」に本院職員として、理事(庶務主任)となっている⁽⁴³⁾。このことから馬場源太郎が乗眞や發智と何らかの関係があったことは理解できる。このことについて、松山町の小作争議を調べる中で、馬場源太郎について、次のような文が書かれていた。「同人ハ同地方ノ名望家ニシテ、明治初年頃ハ数十町ノ土地ヲ有シテイタルモ今ハ僅カ三四反ヲ有スル小作階級ナリト雖、同人ノ親類ニハ西川武十郎、發地庄平等ノ地主アリテ今尚同村ニ於テ相当勢力アリ小作組合長格ナリ」とある⁽⁴⁴⁾。これにより、小作争議の代表を務めたこと、發智家と親戚であったことが検証できた。

さて、發智庄平については、一言では語れない人物でありここでは紹介しきれないため第Ⅱ編でその人物を中心にふれていきたい。

5 おわりに

小島乗眞はなぜ埼玉育児院を始めたのか。埼玉育児院設立に関して必ず使われている「明治天皇聖徳記念事業トシテ佛教主義ニヨリ県下無告ノ孤兒貧童ヲ教養シ独立自活ノ民タラシメ」や、「謹ンデ天下ノ志士仁人ニ訴フ」を、当初、筆者は人びとの感情に訴え、自分の意図する行動にかりたてようとする宣伝文句としてとらえていたが、ここに、乗眞の観音信仰があることが理解できた。乗眞は父乗寛が「大蔵の観音様」と慕われていたことに強く影響を受け、それを具現化しようとして育児院を創設したと考える。その動機となったのが、「埼玉育児院経過ニ関スル赤裸々ノ告白」の「偶々檀徒中ニ可憐ノ孤兒アリ、然モ無情ナル社会ハ反シテ彼ニ種々ノ厭迫ヲ加フルヲ見テ遂ニ坐視スルニ忍ビズ意ヲ決シテ観音大悲ノ実現ヲ期シ孤貧兒ノ友タラントシ」との言葉であり、ここに乗眞の信仰があると感じる。また、7歳で亡くなった娘桃枝の姿を重ね決意を固めたのではないかと想像する。さらに、乗眞の父親である乗寛が安養寺で寺子屋をしていたこと、福田会育児院司事をしていた岩崎信雄との交友関係などがその素地としてあると考察できる。

余談ではあるが、筆者も、乗眞と同じように児童養護施設の寮長(児童20人、職員7人)を7年間経験したことがあり、乗眞の気持ちは少しではあるが理解・共感できる。

今回、いくつかの新しい発見ができたことを整理しておく。

- (1) 1972 (昭和 47) 年に嵐山町の長島喜平が発見した「埼玉育児院設立時の集合写真」は、『小川案内附近郷名所寫真帖』(1917) で掲載されたものと同一であることが分かった。また、この写真が 1917 (大正 6) 年 1 月 6 日の「埼玉育児院、社団法人設立發起人会」に撮影されたことが分かった。
- (2) 「埼玉育児院設立時の集合写真」の小島乗眞は「子どもを抱いている夫人の右隣ではなく、子どもを抱いている夫人から右 2 人隣である」ことが分かった。
- (3) 小島乗眞、主事・2 代目院父小池徳重、岩崎信雄の顔写真が特定でき、また、岩崎の略歴が分かった。
- (4) 小島乗眞の父親は小嶋乗寛であり、安養寺は三世代にわたり寺子屋をしていたことが分かった。
- (5) 松山町最初の移転地「長多屋」の写真が検証できた。一部報告ではこの写真を「育児院が一時滞在していた發智家建物 (当時武揚館と呼んだ)」と紹介している。
- (6) 埼玉育児院が松山に移転したのは、檀家との諍いがあったと伝えられているが、当初は諍いがあったが、次第に理解し、移転時には地元村長を始め村小学校校長など 50 余名による移転祝賀会「本村小島樓」にて催され、檀家等の手厚い見送りがなされている。移転については、1917 (大正 6) 年 3 月 12 日内務省への「社団法人設立許可申請書」をあげるにあたり小島乗眞の借財の整理に伴い、埼玉育児院理事会で決定されたものである。なお、同申請書には「松山町五千六百五十一番」で申請されている。

小島乗眞は、2020 年で没後 90 周年になった。この研究により、長い間、小島乗眞と考えられていた写真上の人物から本当の乗眞が特定でき、地元の偉人として子どもたちに受け継がれていくことができたのは考え深い。また、まだ足りないとは思えるが、本研究により小島乗眞の全体像が少し明らかになったと考える。

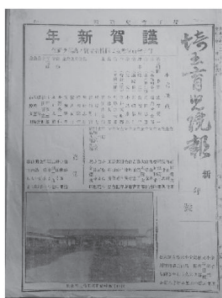
余談ではあるが、小島乗眞の妻たつ (子) は埼玉県で最初の保育士ではないかと考える。たつ (子) を研究する資料がないためここまでとするが、小島乗眞という理想を求めて突き進む夫のため、たつ (子) の献身的な姿はどこかで明らかにしていきたいと思わせる人物である。

最後に、小島乗眞が仏教徒として生きたこと、またその観音信仰により、育児院を構想したこと、さらに、児童に対する一途さと人を信じてやまない行動によって、育児院の基礎をつくることができたことに対し、社会福祉の先人としての敬意を表するとともに、彼の業績が後世に伝え続けられることを願う。

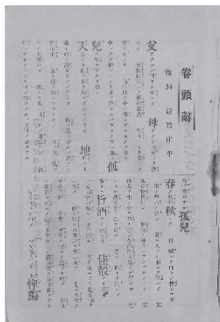
謝辞：本研究にあたり安養寺鶴岡信良住職、長福寺岩本教裕住職、内田康男郷土史家から貴重な資料やお話等を頂いたこと、心から感謝申し上げます。

【参考・引用文献】

- (1) 「社団法人埼玉育兒院援助会趣意」筆者所有。
- (2) 「埼玉育兒院要覧」筆者所有。
- (3) 江島尚俊「明治初期僧侶育成改革と大教院」2011年.294～296頁。
- (4) 学校案内／比叡山中学校・高等学校 (hieizan.ed.jp)「沿革」2021年6月21日閲覧。
- (5) 学校沿革「駒込中学校・高等学校 (komagome.ed.jp)」2021年6月21日閲覧。
- (6) 浄光寺「當山第44世佛塔院岩崎信雄大和尚照影に題す」の中に、1895(明治28)年天台宗大学林支校中学林全科卒業と記述されている。記載は「1973(昭和48)年2月15日 後嗣末弟子春英識」とある。
- (7) 小島乗眞「埼玉育兒院経過ニ関する赤裸々ノ告白」1918年.1頁。
※埼玉県立文書館所蔵行政文書埼玉育兒院関係資料から複写。
- (8) 浄光寺本堂内「當山第44世佛塔院岩崎信雄大和尚照影に題す」から引用。
- (9) 利根川俊吾『ふるさとの想い出写真集明治・大正・昭和東松山』国書刊行会1981年112頁で「安養寺育兒院の写真を懸命に捜しがとうとう入手できなかった。鶴岡福田師(早俣寺住職)から写真を借り出したままの人よ。老師に即刻返却されたい」と訴えている。
- (10) 毎日新聞埼玉版「育兒院50年前にも嵐山で創立記念写真発見」,「半世紀前の大正初期に、比企・嵐山町安養寺にみなし子を集めて開設された『私立埼玉育兒院』の創設記念写真が、このほど同町鎌形、県郷土史文化会理事、長嶋喜平氏の手で発見された。大正初期に農村地帯の私立育兒院は県下でも珍しいケースで、郷土史研究の重要な資料と話題になっている。以下略(毎日新聞埼玉版1972.9.6)とある。
- (11) 関根茂章著『師父列伝 わが内なる師父たち』邑心文庫1997年.中表紙。
- (12) 増田五六編集兼発行『小川案内附近郷名所寫真帖』小川新聞店.1917年。
- (13) 加藤忠雄は「小川町初代町長であり、1889(明治22)年から1929(昭和4)年まで39年10か月小川町町長を務め、県立小川高等学校の前身小川実習女学校の設置等数々の尽力をなし、大正8年2月11日自治功労者として勲六等瑞宝章をおくられた。また日本弘道会小川支会を設立した」。横川禎三は「明治9年横川才助の長男として生まれ、明治学院に学び、明治38年小川製紙同業組合の改組に尽力し、明治42年同組合長に就任、明治40年4月大河村会議員、明治42年村長を歴任、昭和4年9月再度村長に就任した。大正7年比企郡郡議員に就任し、大正8年埼玉県議員に5回当選、大正9年9月には議長として県政の発展に貢献」『小川町史』(1961)から一部抜粋。
- (14) 『埼玉縣比企郡役所』(1923年)「群制施行以來歴代郡長」の中に、加藤忠雄、横川禎三、岡本忠七の写真有。
- (15) この写真は1972(昭和47)年に長嶋喜平氏が発見した。1997(平成9)年に関根茂章氏が(子供を抱く婦人の右隣)」と使用したため、嵐山町教育委員会『小学校3・4学年社会科副読本らんざん嵐山』(2011)、埼玉育兒院『愛する心とこしえに 社会福祉法人埼玉育兒院創立100周年記念誌』(2012)、吉田博行著『社会福祉実務労働の基礎的研究』(2016)は、同様の記述内容で紹介している。なお、荻塚一三郎、金子吉衛著『埼玉の先人渋沢栄一』(1983)、『埼玉県史通史編5近代1』(1988)については、写真は使用しているが人物は特定していない。
- (16) 吉田博行『社会福祉実務労働の基礎的研究』本の泉社2016年.117～118頁。
- (17) 1921(大正10)年の「埼玉育兒院報新年號」筆者所有。



- (18) 矢鳥浩『埼玉育児院一草創時代を中心に』むさしの書房 1979年 .15～16頁。
- (19) 嵐山町 web 博物誌【近世・近代・現代編】第5節菅谷村の沿革大蔵村 (ranhaku.com) 2021年6月21日閲覧。
- (20) 本稿では、公文書等が「小島」と書かれているため「小嶋」を使用しないこととする。
- (21) 嵐山町 web 博物誌【近世・近代・現代編】第5節菅谷村の沿革大蔵村 (ranhaku.com) 2021年6月21日閲覧。
- (22) 乗寛墓石右脇に、「和尚本姓伊東氏天保十三年三月十五日生本郡大串村安政／三年齡十有五師大河村長福寺乘朋得度受戒 励精修業後／十数年偶際維新更革當寺當將遇廢絶厄應懇請入統理／寺務時明治五年齡卅一也尔來戮力相徒得典地所／以定當寺永遠計或開創觀音講社以充衆庶救濟銳意／謀寺門興復在職卅有三年寺門基礎到不可動既而全卅七年／九月二日俄于病越而六日遂遷化他界噫悲或今識其梗／概資後追慕云爾 四十一世乘真 謹識」と書かれている。
- (23) ADEAC (アデアック)：デジタルアーカイブシステム (trc.co.jp)「小平市史近世編三章 村が分かる－十九世紀, 村の幕末維新－第二節人々は何を学んだか－近世後期の教育環境－1 小平地域の手習い塾」2021年6月21日閲覧。
- (24) 埼玉県編集・発行『新編埼玉県史通史編6』1989年 .424頁。
- (25) 前掲18) p140。
- (26) 嵐山町 web 博物誌【近世・近代・現代編】第5節菅谷村の沿革大蔵村 (ranhaku.com) 2021年6月21日閲覧。
- (27) 前掲18) p66。
- (28) 蕪塚一三郎, 金子吉衛著『埼玉の先人渋沢栄一』さきたま出版会 1983年 .220-221頁。
- (29) 前掲18) p206。
- (30) 前掲18) p20。
- (31) 前掲18) p25。
- (32) 小川町教育委員会所蔵旧大川村行政文書『名簿』の中に、村会議員一級として「明治36年4月15日就職, 明治37年4月19日大字青山42番地大木隆次郎, 明治3年1月1日生」とある。また、昭和7年6月22日付『東京日日新聞』に大川村無住寺の惨劇として「前略-小川署に急報した大木は村内きっての漢學者として知られ圓光寺が無住職であるので1年前から檀家の有力者であるため妻と別居留守を引き受けていたものである」とある。
- (33) 前掲18) p40。
- (34) 埼玉育児院『埼玉育児院月報第壹號』1918年 .7頁。なお、『埼玉育児院月報第壹號』については、小川町の内田康男郷土史家より寄贈を受ける。現在、筆者所有。表紙は欠損している。



- (35) 前掲 34) p7。
- (36) 「富岡寅吉日記」昭和 20 年 (1945) 3 月 (ranhaku.com) 2021 年 6 月 21 日閲覧。
※ 1945 (昭和 20) 年 3 月 27 日に亡くなっている。
※ 荑塚一三郎, 金子吉衛著『埼玉の先人渋沢栄一』等の文献では「金井柳作」を「金井耕作」と紹介している。これは, 埼玉県立文書館所蔵埼玉県行政文書大 902-1「社団法人埼玉育児院設立報告書」の比企郡長から大正 7 年 7 月 31 日に出された「法人設立許可申請ニ関スル件」が手書きで「柳」が「耕」に見えてしまうことからきていると思える。
- (37) 前掲 28) p64。
- (38) 前掲 28) p58。
- (39) この写真については, 埼玉育児院『埼玉育児院月報第壹號』發智庄平巻頭言の裏に掲載されている。他誌の紹介で同写真を「昭和 3 年育児院が一時滞在していた發智家の建物 (当時武揚館と呼んだ)」と紹介しているものがあるが, 誤りである。
- (40) 前掲 34) 前段広告。
- (41) 埼玉育児院『愛する心とこしえに 社会福祉法人埼玉育児院創立 100 周年記念誌』2012 年 .30 頁。
- (42) 神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫 農村 (3-043)「新愛知 1921.12.7 (大正 10) 小作, 暴民と化し役場の建具を破壊」神戸大学 電子図書館システム - 一次情報表示 - (kobe-u.ac.jp) 2021 年 6 月 21 日閲覧。
- (43) 『埼玉育児院報新年號』1921 年, 表紙に本院職員として, 理事 (庶務主任) として, 8 番目に記載されている。
- (44) 東松山市教育委員会事務局市史編さん課『東松山市史資料編第 4 巻近・現代編』1984 年 .310 頁。なお, 記載には「發地」と書かれているが, 「發智」の記載間違いであると考えられる。

(おおつか りょういち 幼児教育学科)

2022 年 11 月 10 日受理

